建設業しんぶん

建設産業の今を伝え
未来を考える

11
Nov.2025
No.573

特集

建設キャリアアップシステム

今月の
CCUS
CCUS活用
モデル工事の
支援

CCUS 建設キャリアアップシステム
人を大切に育てる新しいシステムです
事業者･技能者みなさまのご登録をお願いします

一般財団法人
建設業振興基金

確かな安心へ全力応援。

割戻金の支払いが始まっています。

令和6年度分 28.52%、令和7年度8年度も支払いは確定しています。

- **労働者と企業のリスクを同時にカバー**
- **手厚い補償** 被災者補償（労働者福祉）と諸費用補償（企業防衛） 保険金区分合計最高**5,000**万円
- **契約者割戻金制度**により掛金負担が軽減

社員と家族、会社を守るために。

建設共済保険

法定外労災補償制度 制度創設55周年

今すぐ、ご加入を！

「建設共済保険」の他にも、次のような事業を行っています。

育英奨学事業

被災者（死亡および障害・傷病3級以上）の子供に対して、要保育期間および小学校から大学までの在学期間中、返済不要の奨学金を継続して給付。

労働安全衛生推進事業

① 安全衛生用品の頒布
② 女性専用トイレ・更衣室導入費用の助成
③ 安全衛生推進者表彰　等

公益財団法人
建設業福祉共済団
〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-2-8 虎ノ門琴平タワー 11階

■取扱機関：各都道府県建設業協会

さらに新しくなった！
建設共済保険制度の10のポイント ➡

詳しくはHPをご覧ください！

建設共済保険　検索

11
Nov.2025
No. 573

建設業しんこう
建設産業の今を伝え
未来を考える

編集・発行
一般財団法人 建設業振興基金
〒105-0001
東京都港区虎ノ門4-2-12
虎ノ門4丁目MTビル2号館
TEL：03-5473-4584
FAX：03-5473-1594
URL：https://www.kensetsu-kikin.or.jp/

CONTENTS

特集 建設キャリアアップシステム 02
- データで見るCCUSの普及状況
- 「CCUS」をもっと技能者の身近に
- CCUS登録者であることのメリット
- システム等連携で事務処理を効率化、負担軽減
- CCUSを多くの皆様に知っていただくために

FOCUS
工業高校紹介
長野県上田千曲高等学校 08
- インタビュー：関 磨子 先生

PRESCRIPTION
日本経済の動向 10
- 「トランプ後」も問われる日本経済の中期的な成長力

建設経済の動向 11
- 万博後も注目、「サーキュラー建築」を巡る挑戦

連載 かわいい土木【第61回】 12
- 新川橋梁
／香川県木田郡三木町

令和7年度作文コンクール 14

お役立ち連載
建設キャリアアップシステムを活用しよう!【第33回】 17

いつでもチェック!!
建設業しんこうWeb
建設産業の今を伝え
未来を考える
『建設業しんこう』はWebでもご覧いただけます。

しんこうWeb 検索
https://www.shinko-web.jp/
メルマガ登録はコチラから!

「建設業しんこう」に関するご意見・ご要望
TEL：03-5473-4584（企画広報部）
MAIL：kikaku@kensetsu-kikin.or.jp

【建設業しんこう編集委員】
東洋大学理工学部建築学科教授 浦江真人
国土交通省建設振興課長補佐 石井信
(一財)建設業振興基金専務理事 長谷川周夫
国土交通省建設業政策調整官 山影一茂
日経クロステック建設編集長 佐々木大輔

印 刷：日経印刷株式会社
◎本誌記事の無断転載を固く禁じます。

特 集

建設キャリアアップシステム

今日(こんにち)のCCUS 明日(みらい)のCCUS

これは、2025年7月31日に本財団がCCUSとしてはじめて開催した、“CCUSフォーラム2025”のタイトルです。

フォーラムでは、基調スピーチとして、芝浦工業大学 蟹澤教授に、「CCUSと日本の建設業の未来」と題して、CCUSを軸に建設業の未来を語っていただき、これまでの道のりとともに、あらためて、「CCUSは他産業にない基盤システムであること」さらに、「数年後には世界最大規模の登録者を有する建設産業のシステムとなること」を示していただきました。

今回の特集では、“今日のCCUS”の状況とともに、“明日のCCUS”につなげるための取り組みを紹介します。

※蟹澤教授の基調スピーチは、YouTubeの「CCUSチャンネル」からご覧いただけます。
基調スピーチの他、第1部 CCUS先進事例発表会「今日のCCUS」、第2部 トークセッション「外部有識者が語るCCUSの可能性と建設業の未来」も是非、ご覧ください。

基調スピーチ

事例発表会

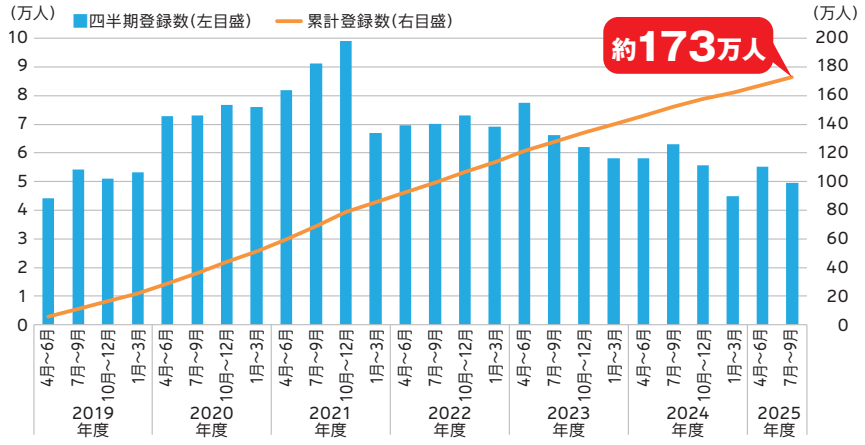
トークセッション

データで見るCCUSの普及状況 2025年9月末時点

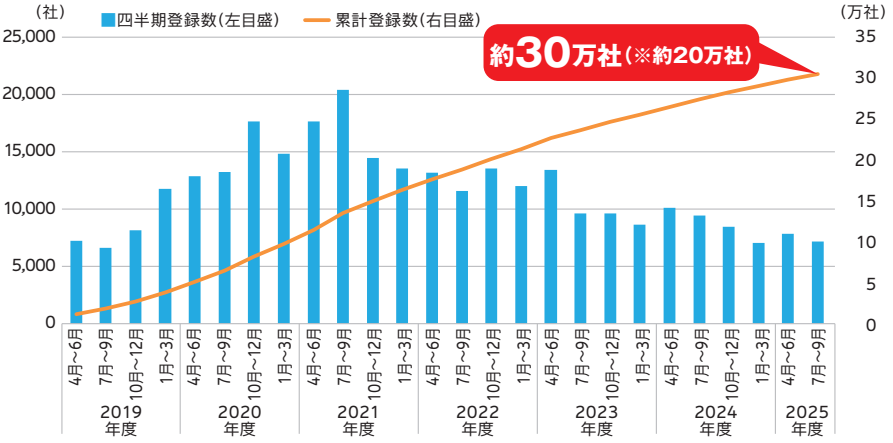
技能者、事業者とも、登録数のピークを過ぎていますが、登録技能者数は、300万人ともいわれる建設技能者数の半数を超えて、なお、増加しており、一人親方を除く登録事業者数※も、工事実績のある許可事業者の約半数となっています。

今後は、登録率の低い地域や職種、資本金規模1,000～5,000万円の事業者等に重点化して、より丁寧に登録促進を図るとともに、CCUSの活用による効果を現出するべく、全体に向けて、就業履歴蓄積促進のための具体的な方策を実行していく必要があります。

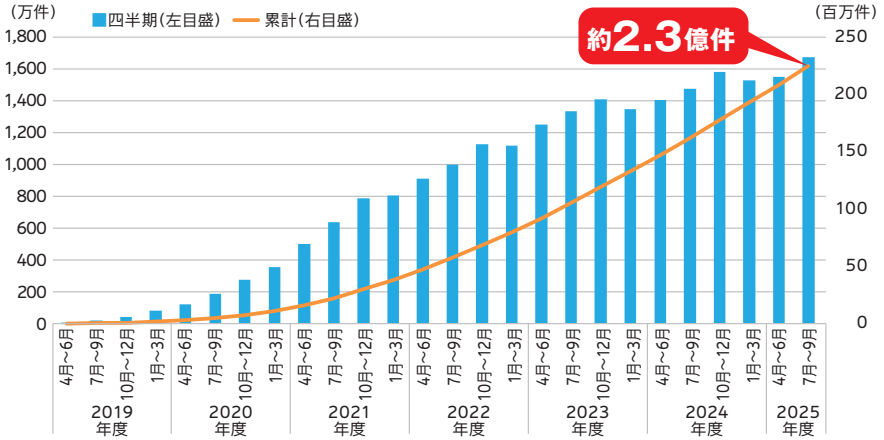
図表1　登録技能者数の推移



図表2　登録事業者数推移



図表3　就業履歴数推移



都道府県別　技能者・事業者登録状況

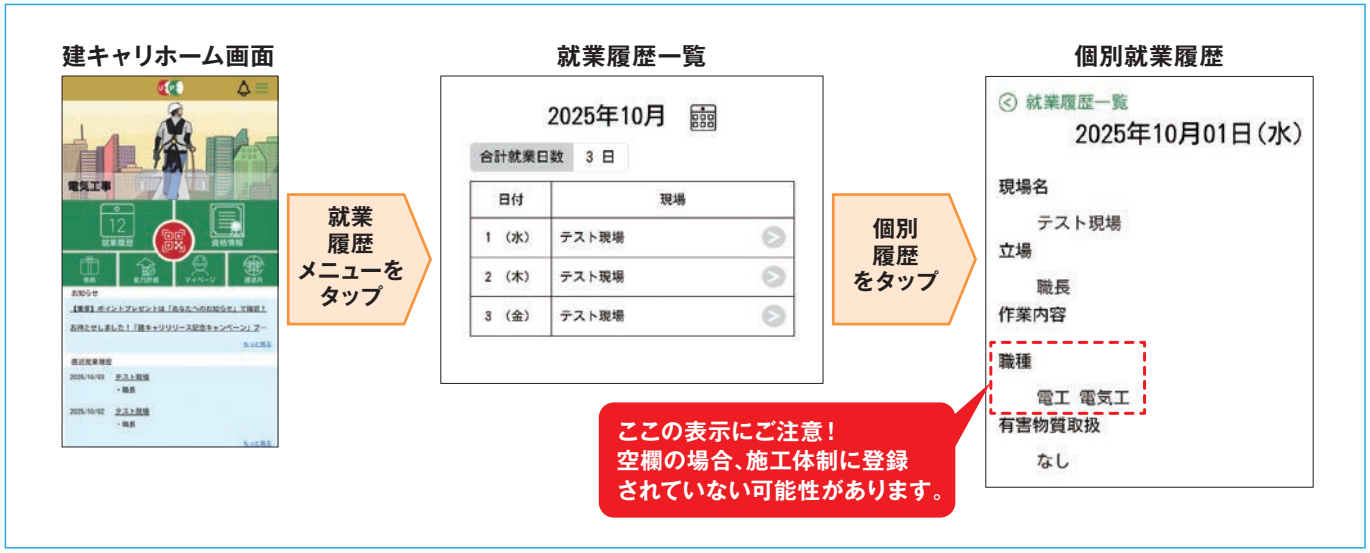
都道府県	技能者登録数（現住所）	事業者登録数（所在地）
合計	1,731,378	302,200
北海道	90,497	12,179
青森県	22,298	2,134
岩手県	21,583	2,096
宮城県	48,252	6,130
秋田県	12,382	1,426
山形県	12,777	1,617
福島県	41,141	4,363
茨城県	35,928	5,955
栃木県	22,610	4,154
群馬県	22,502	4,135
埼玉県	116,310	19,963
千葉県	96,082	14,183
東京都	162,736	33,783
神奈川県	123,701	22,583
新潟県	27,660	3,302
富山県	14,710	2,283
石川県	16,775	3,112
福井県	12,039	1,865
山梨県	10,185	1,667
長野県	22,888	3,911
岐阜県	29,882	5,300
静岡県	42,692	8,422
愛知県	108,440	21,865
三重県	24,354	4,865
滋賀県	11,858	2,301
京都府	25,641	5,758
大阪府	125,006	26,661
兵庫県	54,644	11,495
奈良県	10,203	1,818
和歌山県	7,186	1,276
鳥取県	7,052	1,005
島根県	10,070	1,131
岡山県	25,189	4,799
広島県	45,381	9,453
山口県	19,431	3,608
徳島県	9,708	1,662
香川県	15,319	2,379
愛媛県	16,249	2,770
高知県	8,008	1,183
福岡県	73,705	14,447
佐賀県	12,042	1,611
長崎県	15,432	2,879
熊本県	22,560	3,462
大分県	12,397	1,769
宮崎県	15,563	2,164
鹿児島県	23,364	3,149
沖縄県	26,946	4,127

「CCUS」をもっと技能者の身近に

2024年にリリースしたCCUS登録技能者向けスマホアプリ「建キャリ」は、技能者本人の、就業履歴、登録した資格等をスマホで確認できるほか、「お知らせ」機能で情報入手、「特典」機能でCCUS応援団特典を利用、「建退共」機能で退職金目安が確認できるなど、CCUSを技能者にとって身近なものとして実感できるよう、リリースしたものです。これからも順次、機能アップを図っていきます。

～「建キャリ」利用者は、9月末時点で27,000人を超えました～

建キャリで、就業履歴、立場や作業内容を自分自身の目で確認し、キャリアを構築していきましょう。



～QRコードを活用し、APIシステムで就業履歴の蓄積へ～

建キャリでは、本人の技能者IDをQRコードで表示することができます。

CCUS応援団の特典利用でカード代わりに提示することなども想定していましたが、先般、エムシーディースリー株式会社（以下「MCD3」）が提供するAPIシステム「グリーンサイト」から、建キャリで表示するQRコードを読み込んで入退場を記録する新機能「建設キャリアアップカードリーダーforグリーンサイト」が公開され、「建キャリによるスマホで入退場登録」が可能となりました。

●建キャリQRコード読取イメージ図（MCD3作成）

CCUS登録者であることのメリット

CCUSは、建設業界横断的な制度基盤であり、建設事業に関わる全ての技能者、事業者を対象として、全国規模で展開されています。CCUSにデータを蓄積する登録技能者・事業者が、CCUS及びその規模によるメリットを実感できるよう、支援や付加価値提供の創出に取り組んでいます。

～CCUS応援団からの特典提供～

●CCUS応援団ホームページ

CCUS応援団は、CCUSの周知の進展や登録者数の増加を背景に、「技能者を応援したい」、または、「技能者が多く利用する」企業等からの、登録技能者を対象とした特典提供の申し出を受けて、特典提供者からなる集団として発足したものです。その後、特典提供の対象を事業者に広げ、多数の参加者、特典をそろえるに至っています。そうした状況を踏まえ、今年の7月には専用のホームページを開設し、エリアやカテゴリーで特典を探せるほか、新たに始めた「建キャリ保険」や、セミナーなど、期間限定の特典をピックアップして紹介しています。

CCUS応援団の特典は、建キャリの「特典」機能や、左記のホームページから利用可能です。

～保険事業の開始（登録技能者への福利厚生）～

CCUS登録技能者数が、建設技能者数の半数を超え、170万人に達したことを背景に、新たに、登録技能者を対象に、福利厚生として取り組んでいるのが、「建キャリ保険」です。9月から募集を開始しています。詳しくは以下からご覧ください。

～能力評価申請の支援～

CCUSの目的は、技能者の能力・経験等に応じた適正な処遇改善です。技能者の皆さんが、積極的に自身のレベルアップを図っていくために、この8月から様々な能力評価申請の支援を行っています。その一つとして、「能力評価サポート診断」のサイトを用意しました。無料でレベルアップの目安を知ることができます。

能力評価サポート診断

サポートまとめ

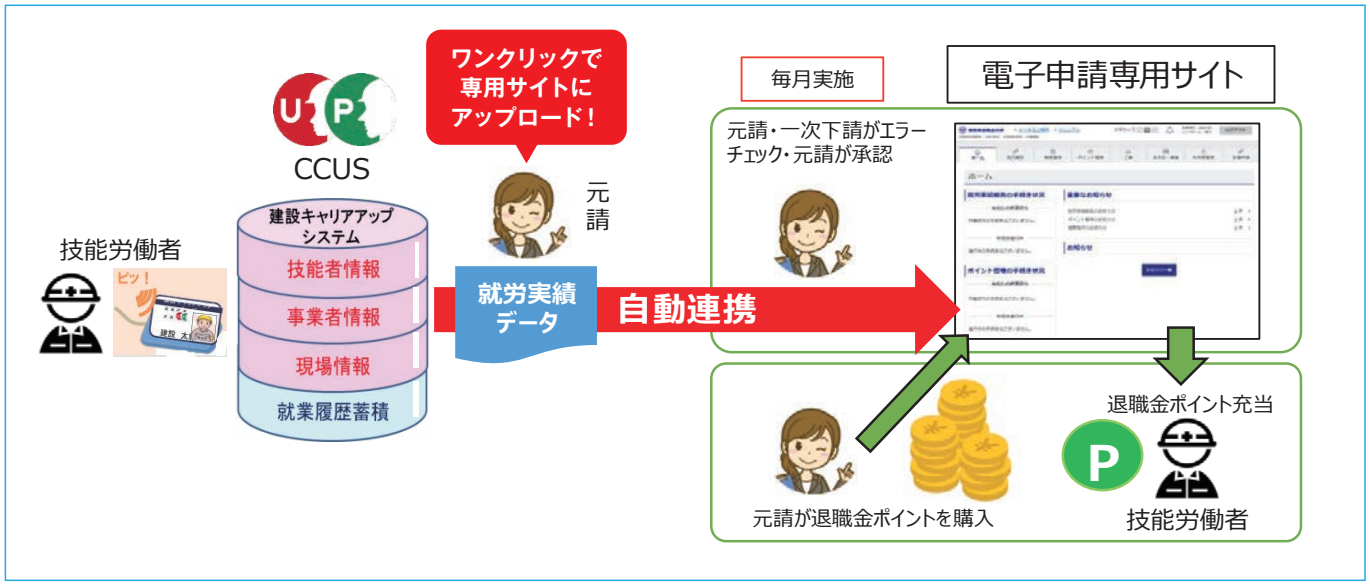
システム等連携で事務処理を効率化、負担軽減

CCUSは、建設事業者や建設技能者が関わるシステムや業務との連携で、事務処理の効率化、負担の軽減を図ることに取り組んでいます。

～建退共電子申請方式とのデータ連携を自動化～

建退共の電子申請方式とCCUSの一括作業方式によるデータ連携について、従来からの手動連携に加え、自動連携を行うことも可能となりました。CCUSの「建退共連携設定」での選択機能です。

●建退共・CCUS自動連携イメージ（元請一括作業方式／一次下請一括作業方式）



～安全書類出力機能の機能追加～

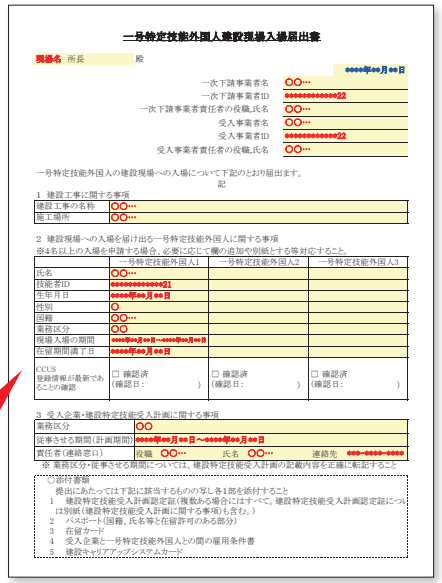
安全書類出力機能に、元請として必要な「一号特定技能外国人建設現場入場届出書」の出力と、「作業員名簿」への業務区分※データ反映を追加しました。なお、CCUSの次期システムでは、国交省の外国人就労管理システムとのAPI連携を予定しています。

※業務区分は、「土木」「建築」「ライフライン・設備」の3区分。2022年に従前の19区分から再編。

●出力できる安全書類

赤字：機能追加したもの

- 施工体制台帳
- 作業員名簿
- 施工体系図
- 下請負業者編成表
- 再下請負通知書
- 一号特定技能外国人建設現場入場届出書



赤字はCCUSに登録したデータが反映されます。

～登録基幹技能者データベースとの連携で情報の自動更新～

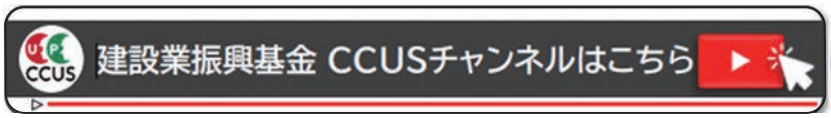
登録基幹技能者がCCUSの新規または変更の登録申請をする際に、登録基幹技能者講習修了証に記載されている「修了証番号」を入力すると、登録基幹技能者データベースから、修了証番号に対応する登録基幹技能者情報（種目、修了年月日、有効期限年月日）が申請画面に自動で反映されるとともに、それ以降は自動で更新されるようになり、「講習修了証の添付」も不要となりました。

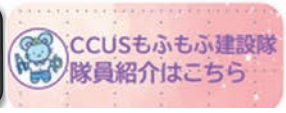
CCUSを多くの皆様に知っていただくために

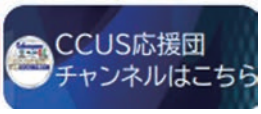
建設業界は、社会生活や経済活動のインフラを支えています。CCUSは、その建設業界の担い手を支える建設業界共通の制度インフラです。社会生活や経済活動を営む多くの皆様に、CCUSを認識いただくことが、建設業界への理解にもつながると考えます。そのために、様々な形で情報を発信しています。

～CCUSチャンネルで発信！～

現場マニュアルの解説から、先進事業者へのインタビュー、子ども向け動画まで、CCUSの魅力を動画で発信しています。CCUS応援団特典、CCUSもふもふ建設隊の各隊員も紹介。とにかく、一度ならず何度でも見てください。







CCUSチャンネルから

NEW 事業者本人申請

NEW 技能者本人申請

CCUS応援団チャンネルから

CCUS応援団　技能者特典　手羽先専門店　てばから　…

CCUS応援団 技能者特典　アンドリース（キャッシュバ…

ＣＣＵＳ応援団技能者特典　Bar銀座七曲署（八丁目に移…

～CCUS“もふもふ建設隊”の登場、活躍～

現場貼付ステッカーデザインから派生したCCUSもふもふ建設隊は、今や本財団を代表するキャラクターとして日々活躍しています。

今年の夏は、建設業の将来を担う子どもたちに
僕らの仕事を知ってほしくてこども霞が関見学デーの
現場にも行ってきました。一緒に働く仲間（職種）を募集中です。

ワンタ

～技能者、事業者だけではなく、行政やエンドユーザー、皆様のCCUSへ～

CCUSは、建設業界共通の制度インフラとして、建設技能者の資格や現場での就業履歴を建設業界横断的に登録・蓄積し、技能・経験に応じた適切な処遇につなげる仕組みです。「若い世代が安心して将来を託せる」「技能や経験に応じて給与を引き上げる」「技能者を雇用し育成する企業が伸びる」建設業を目指しています。左のリーフレットは、そういった意図を込めて、建設業界だけではなく、行政やエンドユーザーにも向けて作成したものです。このリーフレットをはじめ、各種チラシ、CCUSもふもふ建設隊各キャラクターは、無料でダウンロード、利用することができますので、様々な場面で活用していただけると幸いです。

Creating the future with CCUS

第116回

FOCUS

“建築って楽しい!”と感じる心を原動力に!地域とともに育む“住”の未来を担う人材たち。

戦国時代に武勇を轟かせた真田氏ゆかりの地・長野県上田市。千曲川の清流と山々に囲まれたこの地にあるのが、まもなく創立110年を迎える伝統校、長野県上田千曲高等学校です。地域の産業と社会を担う人材の育成に力を注ぐ同校において、建築科は“癒しの空間プロデューサーを目指して”を合言葉に、“住”の未来を創造する力を養っています。今回は、建築科で教鞭をとる関磨子先生に、教育への想いや地域との連携、そしてご自身の歩みについて伺いました。

長野県上田千曲高等学校
建築科
関 磨子 先生

地域の力に支えられた建築教育

同校建築科の卒業生でもある関先生。当時と比べて、取得できる資格の幅が非常に広がったと話す。

「技能検定(大工工事)をはじめ、建設機械や玉掛け、2級建築施工管理技士(第一次検定)、そして卒業後には2級建築士の受験資格も得られます。入学当初は就職や進学への意識がまだ明確でない生徒も、自分たちとつながりのある先輩が資格取得に取り組む姿を目にしたり、先輩たちの資格取得状況などを知ることで、“私たちも負けないよう資格を取得しよう!”と、モチベーションが高まります」。

生徒たちの学びの推進力となっているのは、地域との強い連携だ。2023年には建設業界を支える有為な人材を育成することを目的に、同校建築科・長野県建設業協会上小支部・長野県上田建設事務所の3者による産学官連携の“建設業人材育成にかかる包括的連携協定”が締結された。

「技能検定の材料提供、現場見学の受入れへの助成など、地域の皆様の手厚いサポートが、生徒の学びを後押ししています。また、生徒がプロの仕事に触れられるインターンシップの機会なども豊富にいただいています」。

3者による意見交換会も定期的に行われている。

「意見交換会では、就職希望者の状況や、進学後に地元に戻ってきてもらうための魅力づくりについて話し合っています。こうして“教員が変わっても続く仕組み”が地域に根づきつつあるのは、本当にありがたいことです」。

その他、地元の技能士の方に、技能検定技術講師としての協力を得ているそうだ。

進路支援にも力を入れる建築科では、卒業生が仕事や生活を語る会も開催している。スライド資料を用いて語りかける先輩たちの姿に憧れを抱き、建設業界を志す生徒も多いという。

課題研究

コンクール入賞を目指して奮闘!

毎年、JIA長野県クラブ主催の長野県学生卒業設計コンクールに作品を出品している建築科。生徒の個性と創造力をどうカタチにするかが鍵であり、周りの先生と力を合わせながら、入賞を目標に掲げている。金賞や銀賞といった結果につながることも大切だが、それ以上に“建築って楽しい!”と生徒自身が実感できること、そして“やっていることは何ひとつ無駄ではない”と心から思えること――それこそが、関先生が生徒に届けたいメッセージだ。

“今の建築”を知ってもらうための取り組み

「体験入学や公開授業は、中学生やその保護者たちに“今の建築”を知ってもらえる貴重な機会です」。

参加者の中には、建築科でどういった学びや取り組みが行われているかを知らない方も多いと話す関先生。

「かつての建設業界といえばいわゆる“3K”のネガティブなイメージが強かったのですが、今は職場環境や設備面、給与面も整っており、“以前とは違う”ということを参加者の皆様にもお伝えしています。

コレ推し! 地元の建築物

創建は1290年代とされる安楽寺八角三重塔。禅宗様という形式で建てられ、華やかな木組みや巧みな意匠を特長とするこの塔は、日本で唯一現存する木造八角三重塔であり、長野県初の国宝にも指定されています。「小さな頃から何度も訪れた場所で、遠方から来られるお客様にもご紹介している建築物です。世界に誇る貴重な文化財として、上田にお越しの際はぜひ目にしていただきたいです」。

滋野児童館の建設現場や松本市の競技場建設現場、須坂市のホテル建設現場など、様々な現場を訪れて刺激を受ける生徒たち。プロの仕事を間近に見ることが、自らの進路を考える大きなきっかけとなっている。「建設業界は、以前に比べてより夢のある職場へと変化していると感じています。企業側も人材確保に向けて働きやすい環境づくりに努力されているので、安心して生徒を送り出せるようになりました」と関先生。

毎年夏休みには、地域の中学生を対象に体験入学を実施。建築科ではミニハウスという小さな木造の家を組み立てる体験や、製図の作品展示、パソコンによるCAD体験などを行い、在校生が案内役・指導役として活躍する。「実施後のアンケートには“先輩たちが優しかった”という声も寄せられ、生徒にとっても中学生にとってもよい学びになっていると実感できます」。

また、多くの方が“建築＝大工さん”と思い込んでいるのですが、実際はほとんどの卒業生が施工管理の道に進みます。そうした実情も伝えることで、建築科に進む生徒が一人でも多くなればと思っています」。

参加した中学生や保護者が驚くのは、模型製作や設計演習といった実習の多さだ。「“こんなに製作するんだ!”と驚かれることが多いですね。体験入学においても、手を動かしながら考える実習を通じて、ものづくりの楽しさと奥深さを伝えています」。

成長を続ける“謙虚な負けず嫌い”であれ!

関先生が建築と出会った原点は、幼い頃に見た父親の背中だった。

「父が建築士だったので、幼い頃からトラックに乗せられて現場を見たり、どういった工事なのかを聞いたりするなど、建築自体が身近な存在でした。自然と“建築って楽しい”という感覚が育まれていましたね」。

教員になるまでに数年を要したが、他県や長野県の講師勤務を経て、教員としてのキャリアは33年を超える。

「教える立場になったばかりの頃は、建築科に女性がほとんどいない状態でした。不安はなかったのですが、思うようにいかないことも多く、挫折の連続でしたね。建築のことでわからないことがあると、公衆電話から父に相談していたことを思い出します。そうした家族のサポートをはじめ、周りの先生、そして生徒たちにも支えられたことが、教員を続けてこられた原動力だと感じています」。

また、教員としての自信をつけるために、働きながらも様々な資格取得にチャレンジ。現在も新たな資格取得に向けて自主的に学習を進めている。

「資格は一生の財産になるとともに、確かなカタチとして残るもの。生徒には“チャンスがあるうちに早く取ってほしい”と伝えています。私の挑戦する姿を見せることで刺激になればうれしいですし、逆に私自身も生徒たちに刺激を受けて、勉強のモチベーションを高めています」。

教員生活の中で印象に残る思い出を尋ねると、文化祭でのアーチづくりや、長野県学生卒業設計コンクールでの入賞など、生徒とのエピソードが次々とあふれてきた。その根底にあるのは、教え子たちに建築の楽しさを感じてほしいという想いだ。

「“建設業界で働きたい”という生徒が少ない時期もあったのですが、近年は業界全体が働きやすい職場に変化していることもあり、夢をもって取り組む生徒も増えています。目標に邁進する生徒たちには、建築の楽しさを心から感じてほしいですね。また、変化する時代にあっても成長していくために“謙虚な負けず嫌い”でもあってほしいと思います。素直に行動できる人は、ぐんと伸びていきます」。

生徒には“出会えた縁を大切に”とエールを送る。

「人生の中では、必要なときに必要な人に出会えるもの。私自身も様々な縁に恵まれ、支えられてきました。そのときに出会えた縁を大切に、高校生活やその後の人生を過ごしてほしいと思っています」。

先生からみんなへメッセージ

長野県上田千曲高等学校

〒386-8585　長野県上田市中之条626

WEB https://www.nagano-c.ed.jp/chikuma/

なおも高い実質1%成長の壁。競争力強化・実質賃金上昇が鍵

「トランプ後」も問われる日本経済の中期的な成長力

みずほリサーチ&テクノロジーズ　調査部　チーフ日本経済エコノミスト　酒井 才介

関税を巡る日々の混乱に目を奪われがちだが、日本経済・企業の構造的な「実力」の低迷にも目を向ける必要がある。相対価格の不利が和らいでも、実力が伸びなければ『トランプ後』の中期成長を楽観視することはできない。そこで今回は、輸出や個人消費の中期的な動向に着目し、トレンドとしての日本経済の成長力と課題について考察する。

世界市場における日本のプレゼンスは低下

中国の競争力向上に伴う輸出シェアの拡大等を受けて、日本の輸出はトランプ政権が関税を引き上げる前から伸び悩んでいる。中国やアジアが競争力向上に伴い世界市場における輸出シェアを拡大させる一方で、日本の主要輸出品目（自動車や機械関連）のシェアはいずれも低下基調で推移している。

円高や震災・エネルギー不足への懸念、地産地消への対応力向上などを踏まえた日本企業による生産拠点の海外シフトに加え、中国企業の台頭による価格競争力低下が背景にあると考えられる。「製造強国」に向けてまい進する中国の存在感は今後さらに増していく可能性が大きく、世界における日本主要産業のプレゼンスを維持するためには、中国に匹敵するような競争力のある分野の見極め・強化が不可欠であろう。

実質所得の低迷で個人消費は伸び悩みが継続

加えて、実質賃金の低迷に伴う個人消費の伸び悩みが継続しており、近年は高水準の賃上げが実現する中にあっても足元の個人消費の水準は依然としてコロナ禍前（2019年平均）の水準程度にとどまっている。過去20年の個人消費の伸び悩みの背景には実質所得の伸び悩み（こちらも過去20年の年平均増加率は＋0.2%程度）がある。

近年は、人手不足を背景に名目雇用者報酬が高い伸びを示している一方、消費者物価も食料品を中心に高い伸びで上昇していることから、実質可処分所得の改善にはつながっておらず、実質ベースの所得は依然低い伸びにとどまっている。

実質１%成長のハードルは高い

輸出や個人消費といった需要の柱が伸び悩めば、日本経済全体の成長率の上昇も期待しにくい。中期的にみた日本の実質GDP成長率は精々+0%台半ば程度と筆者は見込んでいる。政府は、「経済財政運営と改革の基本方針2025」（骨太の方針）において、「経済・財政・社会保障の持続可能性を確保するためには、生産年齢人口の減少が本格化する中にあっても、中長期的に実質１%を安定的に上回る成長を確保する必要がある」としているが、現状、実質１%成長のハードルは高いと言わざるを得ない状況だ。

こうした状況では、企業の期待成長率も高まらないため、国内への投資も拡大しにくい。日本政策投資銀行「全国設備投資計画調査」（2025年6月）によれば、10年先の海外生産拠点を強化する意向の企業が63%に上る一方、国内生産拠点を強化する意向の企業は49%にとどまっている。地政学リスク・経済安全保障に対する意識が高まる中で、サプライチェーンの見直し・生産拠点の分散の一環として国内に投資をする動きは出ているものの、輸出・個人消費を中心とした需要の低迷で能力増強投資に踏み切りにくい上、人手不足・電力不足等の供給制約も相まって、中期的にみた国内の投資気運が盛り上がっているとは言い難い。

中期的な競争力強化・実質賃金上昇が鍵

日本経済の持続的成長に向けて、企業の競争力・生産性の向上と、家計の所得向上を通じた内需の底上げが鍵になると考えられる。政府としては、研究開発・イノベーションへの支援を通じて日本経済の競争力・「稼ぐ力」を向上させると同時に、労働生産性の向上等を通じて、インフレを上回る水準での持続的な賃上げを促進し、消費需要を拡大させる必要があるだろう。電気自動車、人工知能、再生エネルギー関連など、グローバルな成長分野における日本のプレゼンスは低く、競争力の再強化に向けて官民を挙げた巻き返しが必要だ。

一方で、米国第一主義（米国の孤立化）、「製造強国」「自立自強」にまい進する中国の台頭といった国際的な潮流は変わらない点を踏まえると、輸出（とりわけ米国向け）で稼ぐビジネスモデルだけでは日本経済の持続的な成長の実現が難しいと考えられ、内需で稼ぐモデルとの両立が鍵になるだろう。「企業の競争力向上・生産性上昇」と「家計の所得・消費の増加」の好循環を実現させられるかどうかに、中期的な日本経済の成長実現がかかっている。

万博後も注目、「サーキュラー建築」を巡る挑戦

日経クロステック 建設編集長　佐々木 大輔

建築界で「サーキュラー建築」への関心が高まっている。建物の部材や設備などをできるだけ廃棄せず再利用することで、環境負荷軽減や持続可能な資源利用を目指す循環型建築だ。大阪・関西万博パビリオンのリユースの取り組みなど最前線をリポート、建築の未来を展望する。

2025年10月13日に閉幕した大阪・関西万博。華やかなイベントの余韻とともに、会期後の会場ではもう1つの新しい物語が始まりつつある。万博を彩ったパビリオンの移築や建材活用といったリユース（再活用）の取り組みだ。

代表例の1つがオランダ館。サーキュラー建築の第一人者である建築家のトーマス・ラウ氏がデザインを手掛けたパビリオンだ。万博後のリユースを前提として、溶接を使わず、ねじで部材を組み立てるなど、建物全体を分解できる設計としている。使われた全ての部材はナンバリングして、情報をデジタル化した。パソナ館とともに兵庫県の淡路島に移築されることが決まっている。

建築家の坂茂氏が設計を手掛けたブルーオーシャン・ドームも閉幕後、モルディブに移築される予定だ。この他、ウーマンズ パビリオンでは、ドバイ万博日本館から再利用されたファサードが、横浜市で開かれる2027年国際園芸博覧会（横浜花博）で再々利用されることが決まった。万博のシンボル、大屋根リングの木材の一部を能登半島地震の被災地で再活用するプロジェクトも動き出している。

万博会場では閉幕直後からパビリオンの解体作業が始まった。万博協会は施設や設備、什器などのリユースをマッチングするための専用サイト「万博サーキュラーマーケット ミャク市！」といった実験的な取り組みも進めており、その成果にも注目が集まっている。

広がるサーキュラー建築の波 建築が「資源バンク」になる

サーキュラー建築を巡る挑戦は、パビリオンといった仮設建築物にとどまらず、恒久利用を前提とした建物にも広がっている。例えば、大林組技術研究所の新実験棟「オープンラボ3」では、既存建物から鉄骨やコンクリート製の構造部材を取り出し、元の形状と性能を生かしたまま新築建物にリユースするという国内初の取り組みが進む。2025年6月に第1期部分が完成した。

竹中工務店は神戸市内に立つオフィスビルの改修で、同社初のサーキュラー建築に取り組んだ。既存躯体を活用し、建て替えに比べて廃棄物量を約8割削減。資材もリユースした。また建材選定プラットフォーム「Material Bank Japan（マテリアルバンクジャパン）」を運営するDesignFuture Japan（東京・港）と共同で、建材の循環性を定量的に評価する建設業界共通の新基準を作成。「サーキュラー建材検索システム」を構築し、2027年までにマテリアルバンクジャパンの全会員が利用できるようにする予定だ。

サーキュラー建築の根本には、「建築は資源貯蔵庫」という考え方がある。オランダで実用化された建築物の資源循環プラットフォーム「MADASTER（マダスター）」では、竣工済み建物を5つの指標で定量評価できる。「正味現在価値」と呼ぶ指標では、解体時に構造材や建材がいくらで売れるかを示す。

建物を資源バンクと捉える取り組みが広がれば、事業計画や不動産価値、設計の仕様、施工法などにも大きな変化が及ぶだろう。もっとも普及へ向けては、再利用先となるプロジェクトとのマッチング、使用・解体時の破損リスク、リユース材保管の追加コストなど、乗り越えるべき壁は少なくない。解体しやすいデザインの工夫に加え、建材のデータバンク化、リユースを促す仕組みづくりなども必要になる。

大阪・関西万博で展開されたサーキュラー建築を巡る様々な挑戦。建築の未来を見据えた取り組みが万博レガシーとして社会に根付くか、今後の展開を見守りたい。

オランダとパソナグループは5月20日、オランダ館を万博閉幕後、兵庫県淡路島に移築すると発表した。左から2人目がトーマス・ラウ氏（写真:日経クロステック）

MADASTER の5つの評価指標

- Mass（建物の重量）
- Circularity（循環性）
- Detachability（分解性）
- Embodied Carbon（エンボディードカーボン）
- Net Present Value（正味現在価値）

オランダで開発された建築物の資源循環プラットフォーム「MADASTER（マダスター）」の5つの評価指標。建物が持つ資源を経済的に評価する「正味現在価値」の項目があるのが特徴だ（出所:取材を基に日経クロステックが作成）

第61回 かわいい土木

階段状の橋脚が語る 複線化の見果てぬ夢

日本列島が観測史上最高の猛暑を記録した2025年夏。「ことでん」こと高松琴平電気鉄道の新川橋梁の写真を撮りに行った。がっしりとしたワークブーツを並べたような橋脚がドボかわいい。110年以上前にこの階段状練石積みの橋脚が誕生した背景には、高松の電気軌道草創期の物語があった。

新川橋梁
香川県木田郡三木町

Photo・Text ▶ フリーライター 三上 美絵
大成建設広報部勤務を経てフリーライターとなる。「日経コンストラクション」（日経BP社）や土木学会誌などの建設系雑誌を中心に記事を執筆。広報研修講師、社内報アワード審査員。著書『土木技術者になるには』（ぺりかん社）、本連載をまとめた『かわいい土木 見つけ旅』（技術評論社）

暑い。とにかく暑い。ただ立っているだけで、髪の先から汗がしずくとなって滴り落ちる。2025年7月下旬、高松琴平電気鉄道の新川橋梁を訪れた。すぐ脇の幹線道路の歩道上で、カメラを下げ、日傘をさして、電車が来るのをじっと待つ。主役は鉄橋だが、ぜひ電車と一緒に写真に収めたい。

駅の近くなので、時刻表を見れば橋の上を電車が通過する瞬間の予測がつく。あと10分、あと5分、来た！　クリームと緑のツートンカラー、2両編成のかわいらしい電車が近づいてくる。脇を締めてコンパクトデジカメを構え、右手人差し指をシャッターに軽く置く。こういうとき、私は連写モードを使わない。コンデジとはいえ一撮入魂、今だ、という瞬間にシャッターを押す。急いで何枚か撮り、眼の前を通過したら、うしろ姿も写す。

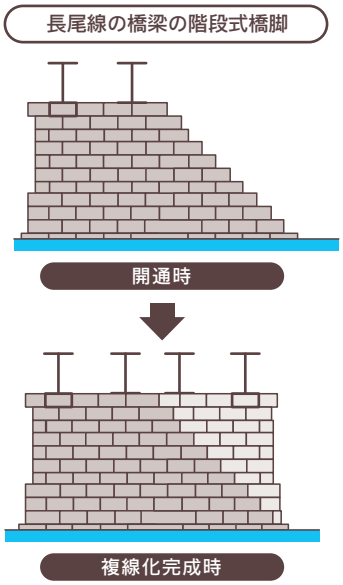
この強烈な日差しでは、カメラのモニターは見えない。憑き物が落ちたように、ふらふらとショッピングモールに入る。体感温度差10℃以上。夢のように涼しい。ひと息ついてモニターを確認したら、1枚だけ橋の真ん中に電車がいるカットが撮れていた。

熱い期待で迎えられた草創期の電気軌道

「ことでん」の愛称で親しまれる香川県の高松琴平電気鉄道。新川橋梁がある長尾線は、高松市の瓦町駅とさぬき市の長尾駅を結ぶ14.6kmの路線だ。新川橋梁は、同社の前身である高松電気軌道の開業前年にあたる1911年（明治44年）に完成している。

大正時代の後半には、当初の木橋から鉄桁へと架け替えられたものの、練石

▲下流側が階段状になった新川橋梁の橋脚



▲階段状の部分に石を積み増し、線路を敷いて複線化する構想だった（「琴電100年のあゆみ」JTBパブリッシング刊、森貴知著を基に作成）

▲新川の右岸側から撮影した渾身の1枚。長尾線の橋では新川橋梁のほかに、公文明～長尾間に架かる鴨部川橋梁でも、複線化を見越した階段状練石積み橋脚が見られる

積みの橋脚は現在まで開業時の状況を留めているという。つまり、この橋脚は110年以上も電車の重みと雨風に耐えてきたことになる。「練石積み」とは、石と石の間をモルタルなどの接着剤で固定しながら積み上げる方法を指す。

この橋で最も目を引き、魅力的でもあるのが、橋脚の石積みが下流側だけ階段状になっていることだ。このため上流側からの眺めは、巨人のブーツが等間隔に並んでいるようでドボかわいい。

なぜ、こんな形になっているのか。それは、長尾線草創期の夢のなごり。当初は終点の長尾の先、現在の東かがわ市の白鳥方面まで路線を延伸する構想があった。新川橋梁も、将来の複線化を見込み、あとから石を積み足して線路を増設できるようになっていたのだ。

公共道路上に軌道を敷設する都市交通機関を「軌道業」と呼ぶ。明治時代半ば頃から、線路上の客車や貨車を馬が引く「馬車鉄道」や人が押す「人車鉄道」が登場したが、電気事業の発展とともに路面電車などの「電気軌道」が急伸。長尾線もこうした時代に敷設された。ただし、高松市付近は道路幅が狭すぎたことから、道路外の敷地に線路を敷設する「専用軌道」となった。

長尾線の開通は沿線の住民から熱い期待を寄せられ、開通式には、装飾を施された各停車場でさまざまな催しが行われたという。造花で飾られた「花電車」が華々しく運行し、この日のためにつくられた「電車開通を祝する歌」で迎えられた。その歌詞は「いなずまの ちからではしる かなくるま」で始まり、「けぶのかげだに のこさねば しゃくのたねとて ないわいな」で終わる。「稲妻の力」とは電力のことか。「煙の影さえ残さないから文句のつけようがない」というのは、蒸気機関車と比較して空気を汚さないことを褒めているのだろう。

▲もとは木製の桁だったが、鉄骨の桁に架け替えられた。橋脚の柱頭部にボルト止めしてある

▲並んだブーツ風。水をスムーズに受け流せるように、橋脚の上流側は丸くなっている

さて、複線化の話はどうなったか。開業後の経営は順調だったものの、東讃地方へ延伸するには山地を貫かなければならず、莫大な建設費用がかかる。その地方の人口や需要を考えると、採算は見込めない。高松電気軌道ではこうした事情を勘案し、延伸をせず既設の路線で収益を維持していく判断を下したようだ。結局、複線化もなされなかった。

その後、第二次世界大戦中の1943年に、国策により高松電気軌道、琴平電鉄、讃岐電鉄の3社が合併され、現在の高松琴平電気鉄道が誕生した。

それからおよそ80年。新川橋梁の階段状練石積み橋脚は、その希少性が認められ、土木学会によって「平成27年度選奨土木遺産」に選ばれた。複線化の夢が消えても、新川橋梁は明治末に栄えた軌道業の歴史と技術を今に伝える貴重な証言者なのだ。

アクセス

高松琴平電気鉄道
長尾線学園通り駅から200mほど

しんこうTODAY

令和7年度「作文コンクール」受賞作品が決定！

国土交通省と建設産業人材確保・育成推進協議会では、高校生の方と建設産業で働く方を対象とする作文コンクールを実施し、優秀な作品を表彰しています。今回は、国土交通大臣賞に選ばれた3作品をご紹介します。

高校生の作文コンクール　国土交通大臣賞 受賞作品

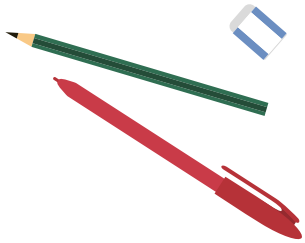
金沢市立工業高等学校
土木科2年
荒木 悠迅 さん

人を笑顔にする職業

受賞者へインタビュー　■Q1 まずは率直に受賞できてとても嬉しく思います。またこの作文を作成することにより、能登半島地震の酷さや、建設業の技術の高さ、偉大さを改めて実感しました。そして、より建設業に魅力を感じることができました。　■Q2 作文にもあるように普段当たり前だった道路が、当たり前でなくなることにより、生活がとても大変になることで、建設業の偉大さを痛感しました。そして、インフラ設備が破壊されることにより悲しむ人を少なくしたいと思い進学しました。　■Q3 座学では、土木構造物の構造や製図などを行なっています。また実習の授業では、実際に外に出てトータルステーションや、レベルなどの器械を使い測量の勉強などをしています。他には、検定や資格取得のための勉強や測量実習などを行っています。　■Q4 私は工業高校に進学し土木について学んでいるため、卒業後はこの学びを活かし建設業の仕事に携わりたいと考えています。また、建設業に携わり私の故郷である石川県をより良い街や社会にしていき、活気のある素敵な街にしていきたいです。

自分たちが毎日使う、よく通るその道路はどのようにしてできているか知っていますか。私は毎日使う、また毎日通るこの道路について深く考えたことなんてありませんでした。しかし、2024年1月1日に起こった能登半島地震により、今までは普通に使っていた道路が寸断や崩落で使えなくなりました。そして移動するのにも今まではすぐに到着する場所でも倍以上の時間がかかり、道路が使えなくなることがどれだけ大変なことか気づかされました。そこから普段当たり前だった道路に興味を持ち、自分は工業高校に入学しました。私は工業高校に入学する前までは道路工事作業員が街で道路を直しているのを見かけるため、この方たちが道路を作っていると思っていました。ですが、この方たちだけでできているのではなく測量士の方などたくさんの人が関わっていることを知りました。また、このことにより建設産業について興味を持ちました。私の最初の建設産業の印象は「力仕事できつそう」、「自分にはできなさそう」、などといったあまり良い印象ではありませんでした。ですが工業高校に進学し、工業や建設産業について学ぶにつれてとてもやりがいのある職業だと印象が180度変わりました。

建設業は、建物を建てるのにも、道路を作るのにも欠かせない職業です。またすべての人が使い生活に欠かせないものを作る仕事です。そしてその作ったものを地図に残すことができる職業であり、今後もなくなることのない必要不可欠な職業だと私は考えています。また、人を笑顔にできる職業だと私は考えています。このように考える理由は、能登半島地震により私の祖母の家が傾き赤色の札が張られ、その家には住むのが危険と判断されたときのことでした。その札を見た祖母はとても悲しんでいました。そこで、「もうこの家には住めないのか」と泣き崩れる祖母を見ました。私は初めて祖母のこんな姿を見ました。そして月日がたち建設産業の技術により、家を直せると祖母が聞いたときとても笑顔になっているのを見ました。建設産業はあれだけ泣き崩れていた人をこんなにも笑顔にすることのできるとても素敵でかっこいい職業だなとそのとき思いました。そして私はこんな建設産業にあこがれを抱きました。私は今後建設産業界の一員となり、これからの社会を築ける立派な人になり、人を笑顔にしたいなと考えています。また私の故郷である石川県を素敵な町や社会にし、震災のあった能登を建設産業の力や魅力で地震の起こる前のような活気のある素敵な街にできるように頑張りたいです。またこれからの建設産業の発展のためにいろいろな人に建設産業の魅力を伝えていきたいなと思います。



受賞者へインタビュー　高校生の作文コンクール

Q1 受賞された感想を教えてください。
Q2 なぜ工業高校に進学しましたか？建設系の勉強をしようとおもったきっかけ 等
Q3 学校ではどのような勉強をしていますか？
Q4 将来の夢を教えてください。

高校生の作文コンクール　国土交通大臣賞 受賞作品

徳島県立
阿南光高等学校
都市環境システム科2年
四宮 渚咲 さん

あの神社からはじまったこと

受賞者へインタビュー　■Q1 このような素晴らしい賞をいただき、大変光栄です。支えてくださった方々に心から感謝いたします。体験をもとに綴った自身の言葉で、建設業の魅力を表現できたことを、大きな喜びとして感じています。　■Q2 幼い頃に目に焼き付けられた境内の情景が原点であり、その時抱いた想いを胸に専門的な技術を学べる環境を求めて工業高校への進学を決意しました。　■Q3 土木では、測量や構造設計を、建築では法規や製図を学びながら、幅広い知識や技術に触れています。実習では安全や倫理を意識することで、技術だけでなく技術者としての心構えも少しずつ身に付いてきていると感じています。　■Q4 地図には描けない、人々の心にいつまでも残り続ける景色を生み出す１人として、建設に向き合うのが私の夢です。現場に足を運び、日々学びながら、暮らしや町に彩りを添えられるような技術者になりたいです。

幼い頃、母の手に引かれて、山あいの神社を訪れた記憶がある。苔むした石畳に二つの足音を落とすたび、風の音、木々のさざめき、遥か遠くからは、ウグイスの声も聞こえてくる。かえって際立つ静けさは、まるで時さえも歩みを緩めたようで、私はただ、その空間に母の体温と春の訪れだけを感じていた。

境内の奥深くには、社が静かにたたずんでいる。風雨に洗われた細かなひびも、穏やかな色合いに変化した木の表面も、人々が長い間、大切に見守ってきたという証のように感じられ、私の幼い目に強く焼き付けられた。同時にその光景は、「どうして、あの社は長い年月を経てもなお、美しくそこにあり続けられるのだろう」という小さな問いを、心に灯した。

高校生となった私は、徳島県西部に残る「うだつの町並み」を訪れた。連なる瓦屋根や木造の格子戸、隣屋の間の「うだつ」細い路地。一本の道に映るのは、歴史の重みだけではなく、当時の人々の暮らしをうかがうことのできる、穏やかな日常の風景だった。さらに、戸ごとの家屋には、陽の入り方や風の通り道、災害から人々を守る工夫が施されていることに気づいたとき、幼い日に感じたあの問いの答えに少し触れられたような気がした。「建てる」ということは、単に形を作ることだけではない。暮らしを支え、命を守り、未来と地続きである「今」を築く行いである。そしてその本質は、昔も今も、何一つ変わっていないのだと。

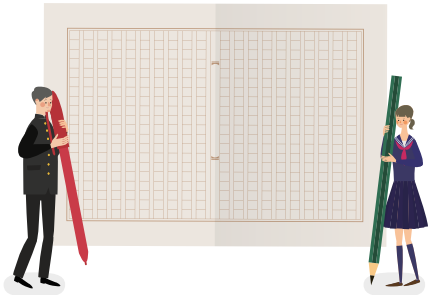
今、私は高校の授業で、建設の現場を支えるさまざまな知識や技術について学んでいる。

衛星やドローンを用いた測量、施工の手順や安全管理、現場見学ではARを用いた空間の可視化や、IOTによってその全体がリアルタイムでつながる施工の様子など、日々目の当たりにしている。それは、幼い私が考えもしなかった未来の建設業の姿である。

現代の構造物は、最新のデジタル技術によって効率的に創られるため、無機質で冷たく感じられることもあるかもしれない。しかし、その背景には、長年の経験を積み重ねてきた職人たちの技術や知識がしっかりと根づいている。建築に携わってきた人々の数だけ、載せた想いが、目には見えないけれど確かに構造物に宿っているのだと確信する。建設するとは、目に見える構造物を、創ることに加え、人々の暮らしや想いが交差する場を作り上げていくことであり、誰かの今日を守り、その先も寄り添っていくことだと考える。

私は建設産業に、心から敬意を抱いている。それは古き社を守り、町並みを今につないできた職人たちすべてを支える、「誰かのために」というまっすぐな想いに触れているからに違いない。

いつか私も、建設業を通して、その想いをしっかり受け取り、次の世代へと手渡していける人間になりたい。汗にまみれた努力も、積み重ねた時間も、誰かの暮らしや心の拠りどころとして、静かに息づき続ける。そのように、未来へと続く一歩に、自らも関わっていきたい。その実現のためにも、私は心惹かれた構造物に自ら足を運び、その技術をこの目で直に感じ、さらに、新たな視点からも構造物をとらえ、誰かを支えられる技術者になりたい。その夢が実現するとき、あの日、神社の静けさに心惹かれていた、幼い日の私がきっと一番喜んでくれると思う。



受賞者へインタビュー　高校生の作文コンクール

Q1 受賞された感想を教えてください。
Q2 なぜ工業高校に進学しましたか？
建設系の勉強をしようと
おもったきっかけ 等
Q3 学校ではどのような勉強をしていますか？
Q4 将来の夢を教えてください。

私たちの主張　国土交通大臣賞 受賞作品

株式会社香山組
（兵庫県建設業協会）
寺田 昌司 さん

こうじげんばのひと

受賞者へインタビュー　■Q1 この度、最高の賞を頂けたことに大きな喜びと感謝の気持ちでいっぱいです。昨年度、自ら「作文コンクールに応募したい」と言って立派な賞を受賞した2人の部下の姿に感銘を受け応募しました。威厳が保ててホッとしています、、、。　■Q2 3Dモデルの作成業務の求人を見て、デジタル技術で建設のものづくりに貢献できることに胸が高鳴り、入職を決意しました。今の建設業は未経験でもチャンスがあり、可能性は大きく広がっていると実感しています。　■Q3 建設ディレクターとして、現場技術者の幅広いサポートを行っています。今ではDXだけでなく、GXやSDGsに関する業務も任せられるようになりました。チームを支え、自らも成長できるこの仕事に大きな誇りを持っています。　■Q4 文中にもある通り、子どもたちが将来なりたい職業に「こうじげんばのひと」が当たり前に並ぶ時代をつくることです。そのために、「自分も関わってみたい！」と思えるきっかけを子どもたちに届けていきたいと考えています。

「パパは工事現場でどんなお仕事をしているの？」6歳の息子からのストレートな質問に私は一瞬、言葉に詰まった。

私は「建設ディレクター」として工事書類を作成したり、三次元モデルを作ったり、現場技術者と協働して工事の進行を支援する仕事をしている。しかし、その仕事をどう伝えていいのかが、分からなかった。

建設業界に入職して4年が経つ。以前は鉄鋼メーカーで勤務をしていた私は、BIM／CIMモデルを作成するCADオペレーターの仕事に魅力を感じ、未経験のままコロナ禍真っ只中で転職を決意した。最初は右も左も分からず、毎日が手探りだった。それでも、三次元モデルを使った業務は、工事の内容を“見える化”できる特性があり、現場技術者とのコミュニケーションは取りやすかった。また、未経験だったからこそ「知らない人の目線」で、工事の目的や重要性をわかりやすく伝えることができたと思う。

この業界に入ってから、何人もの仲間が去っていく背中を見送ってきた。担い手不足や厳しい労働環境など、業界が抱える課題は少なくない。それでも私はこの仕事が好きだ。だからこそ、もっと多くの人に建設業の魅力を伝えていきたいと考えるようになった。

入社からちょうど1年が経つ頃、私は国土交通省が掲げる、デジタル技術を活用して工事の効率化を図る「インフラ分野のDX」の考えに共感し、「DX推進部を立ち上げたい」と会社に提案した。当時、業界経験の浅い私に対し、周囲の反応は冷ややかだったが、社長だけは「やってみましょう」と背中を押してくれた。

部を立ち上げてからは、工事の生産性向上に加えて、地域や子どもたちに工事の面白さを伝えることに力を入れた。作成したCIMモデルを活用して、普段一般の方が入れない現場をバーチャルで再現し、VRゴーグルをつけて体験してもらったり、夜のイベント会場では重機にイルミネーションを飾りつけて展示したり、近隣の保育園や小学校と一緒にクリスマスイベントも開催した。現場やイベントに来てくれた子どもたちが「工事現場っておもしろいね！」「また遊びに来てもいい？」と目を輝かせてくれた瞬間、私はこの取り組みの意義を確信した。

建設業は、何よりも「チームでつくる仕事」だ。施工管理、測量士、建設技能者、重機オペレーター、そして私のような建設ディレクター。それぞれが専門性を活かし、朝から日が暮れるまで一つの目標に向かってひた走る。そして完成した工事は「工事成績評定点」という形で評価され、良かった点も悪かった点も工事期間のすべての努力がフィードバックとして返ってくる。どれだけ優秀なホームランバッターがいても、チームにキャッチャーもピッチャーもいなければ、試合には勝てない。現場で共に働くそれぞれの分野のスペシャリストが力を出し合い、多様な技術と情熱が集まり、一つの「ものづくり」が形になっていく。この「チームでつくる力」に私は心から魅力を感じている。

最近では、建設業に興味はあるが、現場での作業に不安を感じている人も多い。だからこそ、「自分にもできるかもしれない」という新たなキャリアの選択肢として、建設産業の多様な関わり方を発信していきたい。年齢や性別、経験の有無に関係なく、「やってみたい」という情熱があれば、誰だって活躍できる場がここにはある。

ある日、現場から直行して作業着のまま保育園に息子を迎えに行ったことがあった。普段の私は、他のお父さんたちに合わせてパリッとしたワイシャツを着ていたのだが、その日は園児たちが「すごい！工事現場の人だ！」と集まってきた。息子は誇らしげに私の隣に立っていた。汗臭く、お世辞にも綺麗とは言えない作業着の姿が、子どもたちの目には輝いて見えていたのだ。その時、私は気づいた。大人が思う「かっこいい」と、子どもたちが思う「かっこいい」は違うんだと。その日から、私は作業着のまま保育園に迎えにいくことをためらわなくなった。

野球選手やパティシエ、警察官、看護師。子どもたちの「将来なりたい職業」にはさまざまな夢が並ぶ。しかしその中に工事現場で働く仕事の名前はほとんど登場しない。なぜなら、これらの仕事にまだ統一された魅力的な呼び名が存在しないからだと私は考えている。だから私はあえて「こうじげんばのひと」と呼びたい。大人が思う、かっこいい呼び名ではないかもしれない。それでも、子どもたちは自然とそう呼び、憧れの眼差しを向けてくれている。

私は、未来を担う子どもたちの「将来なりたい職業」に、「こうじげんばのひと」が当り前に並ぶような時代をつくりたい。建設業には、誰かの暮らしを支え、未来をつくる力がある。その素晴らしさを、幼い頃から子どもたちに伝えていきたい。将来の担い手は、今、目の前で遊んでいる子どもたちなのだから。

私はこれからも「こうじげんばのひと」として、建設業の魅力を伝え続けていく。

受賞者へインタビュー　私たちの主張

Q1 受賞された感想を教えてください。
Q2 建設業へ入職したきっかけを教えてください。
Q3 現在はどのようなお仕事をされていますか？
Q4 今後の目標を教えてください。

建設キャリアアップシステム 第33回 を活用しよう！

CCUS活用モデル工事発注を検討中の公共発注者の皆様！

―CCUS活用モデル工事全般にわたり、「深く、広く」サポートします―

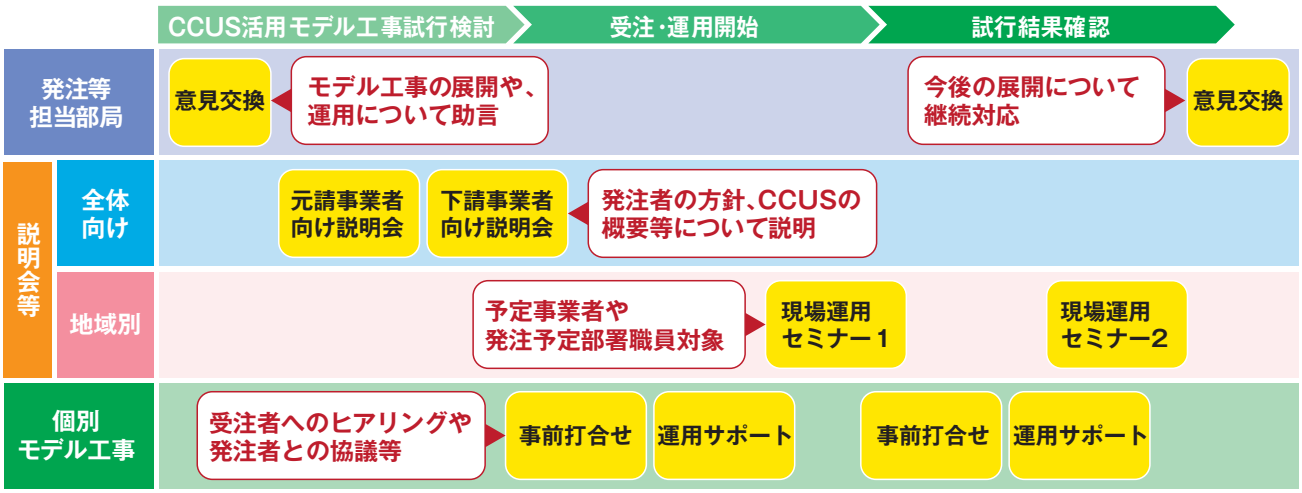
本財団では、CCUS活用モデル工事をサポートすることにより、

- ➤ **公共発注者が趣旨・適正な運用を理解し促進すること**
- ➤ **きめ細やかな対応で受注者がCCUSを活用する事業者になること**
- ➤ **見学会等を開催することで他の発注者・事業者へ水平展開されること**

を図っています。そのために、

- **公共発注者の求めに応じて、CCUS活用モデル工事単体だけではなく、自らの要領等を運用するにあたっての助言や、職員・事業者への説明・講習など、深く、広くサポートします。**

公共発注者（地方公共団体）へのサポート例



CCUS活用モデル工事の試行検討で、要領を具体的に実施するための助言から、管轄全体の事業者を対象とした概要説明、各地域毎の実践的なセミナーの実施、契約締結後のCCUS活用モデル工事の個別サポート、さらに、その先の展開に関する助言等まで対応。

- **公共発注者の皆様も、試行検討の段階で構いませんので、CCUS活用モデル工事についてサポートをご希望の際は、以下の内容を記載のうえ、メールでお知らせください。**

- 担当者の氏名・所属・連絡先
- Zoomの使用の可否（Zoomが使えない場合は、「Teams希望」など記載）
- CCUS活用モデル工事の概要等（発注者、工事名、工期、下請の有無・登録状況等）
  ※発注者の場合はサポートを要する内容等、適宜

申込先：（一財）建設業振興基金　建設キャリアアップシステム事業本部　普及促進部
申込先メールアドレス：ccus01@kensetsu-kikin.or.jp

FRONTIER フロンティア

建設の最前線へ！

PROFILE

領家 隆了（りょうけ たかさと）さん

株式会社中鉄
大阪府出身

「仲間を信じて、現場を動かす!」安全かつ確かな工事を手がける鉄筋工のリーダー。

大阪を拠点に、鉄筋工事業を担う株式会社中鉄。その現場で職長を務めるのが、登録鉄筋基幹技能者であり、CCUSゴールドカード保持者でもある領家隆了さんだ。鉄筋工として活躍していた父の仕事を手伝っていたことが、建設の道を歩むきっかけとなった。「最初はそれほど興味が無かったのですが、やってみたらおもしろくて（笑）」と語るその表情には、仕事への愛着がにじむ。

現在は、作業の指示から安全・品質・工程・資材管理、若手育成まで、現場のあらゆるマネジメントを担う立場となった領家さん。朝はメールをチェックしつつ、配筋図を見ながらその日の作業をイメージし、必要資料を整える。工程の組み立てにおいては「慌てず、戻り作業のないように確実に進める」ことを第一に考えるという。領家さんが特に重視しているのは、作業動線の確保と品質チェックだ。「朝礼後にはKYミーティングを実施し、危険なポイントを作業者全員で共有しています。また、現場作業が終了した後にはサブリーダーと共に仕上がりを確認しています」。工程管理においては、他業種との連携も不可欠だ。「マンションの低層階など、序盤の工程は特に神経を使います。前の業者の作業が遅れると、自分たちの工程にも影響が出てしまうもの。だからこそ、先を読んだ段取りと柔軟な対応が求められます。着々と工程が進めば、チームとして仕事の流れもつかみやすくなり、落ち着いて作業にあたれます。その流れをつかむまでが、工事における一つのポイントになりますね」。

まだ20代半ばのころは、「すべてのことを自分でやろうとして、疲れてしまった時期もあった」と話す。そんな領家さんを救ったのは、ある建設会社の課長からの言葉だった。「“もっと周りを信用してやっていかなあかん。一人で仕事しているわけやないんやから。”と言われて。その言葉は今も心に残っています」。それ以来、仲間への信頼を軸に現場を動かすスタンスが、領家さんの支柱となっている。日々のチームづくりにおいても、「言いにくいことでもしっかりと言える関係性」が重要だという。「休憩中には雑談を交え、明るい雰囲気をつくっています。大事なのは、思っていることを“言いにくい空気”をつくらないこと。遠慮なく意見を言い合える現場づくりこそが、安全で円滑な工事につながります」。その言葉には、現場を預かるリーダーとしての自覚がにじむ。

30年以上にわたって建設現場で働いてきた中で、安全面やICT環境の向上といった変化も実感している。「紙の図面がデータへと変わり、暑さ対策などの現場環境も改善されています。若手の職人たちはスマホで図面を見たりもしていて、時代の進化を感じますね」。

休日にはゴルフや温泉旅行を楽しむ一面も。「50歳になって、ようやく温泉の良さがわかってきました」と笑顔を見せる。現場での緊張感と、プライベートのリラックス。そのバランスを保ちながら、今日も領家さんは現場の最前線に立っている。

Great Job!（グレートジョブ）

株式会社中鉄
代表取締役
中川 六雄 氏

近年、建設業界の日本人離れが続いている中、改めて技能実習生や特定技能外国人の存在の重要性を理解し、彼らの技能や知識を底上げすることで建設業界の発展につながると信じております。現在、特定技能2号となった作業員が4名となり、彼らに続くように日々教育を続けております。外国人の成長が日本人の成長と業界全体の成長につながると信じ、自社だけにとどまらず他業種とも連携を取りながら建設業界発展のために尽力していきたいと考えております。

建設人材育成優良企業表彰『優秀賞（総合部門）』を受賞

建設業しんぶん
Nov. 2025 No.573
令和7年11月10日発行
第50巻 第7号 通巻第573号
■編集・発行 一般財団法人 建設業振興基金
〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-2-12虎ノ門4丁目 MTビル2号館